

〇〇もんずら

鬼から すれば



…(略)…桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来を従えたまま、平蜘蛛のようになつた鬼の曾^{しゅうちよう}長^{おごそ}へ厳かにこういい渡した。

「では格別の憐憫^{れんぴん}により、貴様たちの命は赦^{ゆる}してやる。その代りに鬼が島の宝物は一つも残さず献上するのだぞ。」

「はい、献上いたします。」

「なおそのほかに貴様の子供を人質のためにさし出すのだぞ。」

「それも承知致しました。」

鬼の酋長はもう一度額を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた様に何か無礼でも致したため、御征伐^{ごせいばつ}を受けたことと存じて居ります。しかし、実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様に

どういう無礼を致したのやら、とんと合点^{がてん}が参りませぬ。ついてはその無

礼の次第をお明^{あか}し下^{わけ}さる訣には参りますまいか？」

桃太郎は悠然と頷いた。

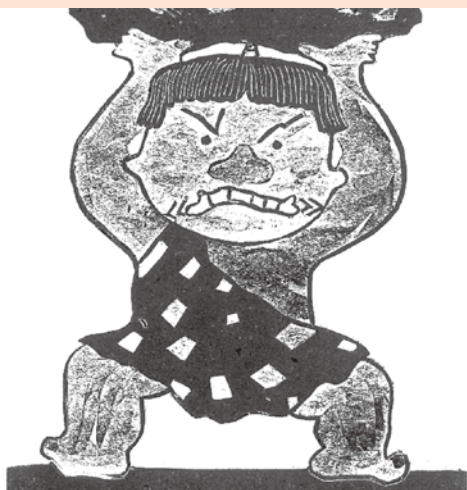
「日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱えた故、鬼が島へ征伐に来たのだ。」

「ではそのお三かたをお召し抱えなすつたのはどういう訣でございますか？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子^{きびだんご}をやつて召し抱えたのだ。 どうだ？これでもまだわからないといえ、貴様たちも皆殺してしまふぞ。」

鬼の酋長は驚いたように、三尺ほど後へ飛び下がると、いよいよまた丁寧にお辞儀をした。…(略)。

(大正十三年六月) 【青空文庫】



芥川龍之介さんは、昔話「桃太郎」を鬼の立場からの物語にしました。鬼が島で安穩に暮らしていたのに、征伐される意味がわからない鬼たち。桃太郎の身勝手な言い分にもひれ伏すしかありません。得々と故郷へ凱旋した桃太郎のその後は……。

この構図、戦国時代にも植民地支配時代にもそして争いの絶えない今にも当てはまるかも。などなど考えては、一寸法師・こぶとりじいさん・羅生門の鬼・酒吞童子・泣いた赤鬼…昔話や童話に出てくる鬼に共感している秋です。